南部の告発

—フォークナー短篇小説論—

丸田明生

はじめに

Faulknerの作品を読む時、我々は極めて鮮明な印象をもってアメリカの南部 Mississippi の一地域について知らされるのであるが、そのうちに我々は、その猫額の地域に生活する人間の行動が決して一地方人として特殊的に見過ごされる人達ではなくて、ひろく世界的普遍性をもった人間であることを認識せざるを得なくなると同時に、又、彼のえがく過去の人物が——Faulknerの登場人物の多くは過去の人物であり、それ故に彼の作品の多くは「語り」の形成をとるのだが——次第に過去から現代にむかって、丁度迫りくる列車のようにスピードを増して拡大しつつ我々を圧倒するかのように迫るように思えるのである。その意味で、まさに彼の作品は、ユニークな手法を用いることによって、より迫力的に、彼の意図する問題を我々の前に提起したといってよく、そしてその手法こそが、人間を歴史的にみることによって、より人間の本質に肉迫出来るものだということを立証しているように思われる。いわゆる呪われた南部の歴史は、又、呪われた人間の歴史といってもよく、幾分デフォルマシオンがなされているとしても、そこに見られる旧約聖書から現われ出たかの如き人間の中に、我々は人間の赤裸々に写し出された鏡をみる心地がするのである。

本論は、比較的分析がなされていない短篇の中から三つをとりあげてみた。南部におけるインディアンの末路、‘Poor White’の悲惨、それに黒人の苦悩と悲哀をそれぞれテーマとしたものである。

(1)

"Red Leaves"は、1931年出版された*These Thirteen*の中に収められたChickasaw Indianを取扱った短篇であり、Malcolm Cowley も彼の*The Portable Faulkner*の中でこの作品をチカソー・インディアンを扱っているFaulknerの四つの短篇の中で最も力強いものであると評しているものである。[1] Faulkner が 'most powerful' という言葉を使っているとしても、そのpowerfulの意味は、このChickasaw 族の力強さでは決してなくて、読者に与える印象の強大さを示していると解する外はないであろう。というのは、この作品における三代のインディアンの The Man (首長)にあてられた作者の眼は、代を重ねる毎に次第に凋落し、三代目ともなればその凋落振りは目を覆わしめる程になるインデイアンをえがいているからである。しかし当然のことながら、これらIndianのうらぶれた姿は何に起因するものであるかが問われなければならないであろう。Faulknerの意図ともまたそこにあったものと考えられる。

先ず一代目のDoomであるが、彼はまだ若僧だった頃、既にヨーロッパ的な都会だったNew Orleansに出かけていき、そこでナポレオンがあのように没落しなければ彼の側近の元帥になっていたような男と知り合い、賭博師や殺し屋のあいだでは親分といわれる程の男になっていた。彼とそのフランス人の二人は次のように描写されている。

> They were seen everywhere together --- the Indian, the squat man with a bold, inscrutable, underbred face, and the Parisian, the expatriate, the friend, it was said, of Carondelet and the intimate of General Wilkinson. Then they disappeared, the two of them, vanishing from their old equivocal thaunts and leaving behind them the legend of the sums which Doom was believed to have won, and some tale about a young woman, daughter of a fairly well-to-do West Indian family, the son and brother of whom sought Doom with

---

1) *The Portable Faulkner,* edited by Malcom Cowley (The Viking Press, 1965) p.2.

a pistol about his old haunts for some time after his disappearance. [82] [2]

DoomがNew Orleansから姿を消してからしばらくして、彼が手中にした西インド諸島のある裕福な家の娘は、インディアンと黒人に付添われて、既に故郷のインディアン部落に帰り、首長の座についていたDoomのところへ迎えられていく。彼女は既に身ごもっており、その彼女に対して、Doomは、叔父と従兄が突然亡くなったために自分は首長になったのだ、という以外は何も話さない。しかし、これは当然その裏にかくされた何かの存在を作者は臭わせている。即ちDoomが、New Orleansでの賭博師や殺し屋仕込みの——即ち文明のdark side仕込みの——策略を用いて、まだあまり文明に汚染されていなかったinnocentな叔父や従兄を、当然の首長継承者の地位から追っ払ったことが暗示されている。そして彼が、この西洋文明の悪い毒液に染まっていった姿は次の文中に読みとることが出来る。

> Doom and the woman were married there a short time before Issetibbeha was born, by a combination itinerant minister and slave trader who arrived on a mule, to the saddle of which was larked a cotton umbrella and a three-gallon demijohn of whisky. After that, Doom began to acquire more slaves and to cultivate some of his land, as the white people did. But he never had enough for them to do. In utter idleness the majority of them led lives transplanted whole out of African jungles, save on the occasions when, entertaining guests, Doom coursed them with dogs. [82]

Doomが息子のIssetibbehaが生まれる直前にその西インド諸島から、彼女の兄にピストルで追われるような状況で連れ帰った女と結婚式をあげたのは兎も角として、その式を執り行なったのが巡回牧師兼奴隷商人であったということが、更にこのDoomの「運命」を予言する。——

---

2) William Faulkner; *These Thirteen* (Chatto & Windus, 1974) p.82.
以下引用文の末尾の数字は上掲書同巻の頁数をあらわす。

Doom という名は、New Orleans 時代に仲間がつけたフランス語で I' Homme, 英語で The Man（首長）という意味であるが、不思議に doom（運命）と一致する。それはインディアンの運命に通じるように思われる。—— Doom は、New Orleans で多分手に入れたと噂されている大金でもってであろう、白人と同じように沢山の奴隷を手に入れ、それによって自らは何もすることのない安逸な日々をむさぼるようになるのである。

Doom が New Orleans で交際したフランス人と同様、この結婚式をとりもった白人も、インディアンを高揚させ文化水準を高めることなど少しも念頭にないのは勿論、西洋の珍しいもの、その中でも特に彼等を堕落に導くものを与えて没落していくインディアンを腹の中では嘲笑していたのであろうか。この牧師兼奴隷商人が持参したウイスキーの瓶やコーモリ傘は、その証左というべきであろう。

インディアンが黒人奴隷を所有していたということは一寸不思議に思えなくもないけれども、白人は自分達の生命の安全や土地の所有の問題で先住民族たるインディアンと取引をしなければならなかった場合も考えられ、その一つに奴隷の取引も行なわれたのであろう。しかしインディアン達は、この奴隷の労働によって生まれる産物を有効に処理する方法を知らなかったし、貿易を行なうだけの社会を持たず、勿論白人達もそれを教えるようなことはなかったであろうから、インディアンの社会は発展しないままに、労働だけが黒人によって取りあげられる結果となったのである。

それ故に、Doom が死に、Issetibbeha が19才で首長になった時の親族会議で、今や五倍にも殖えた黒人達を処理する方法について話し合った時、黒人を食とする話まで大真面目にとび出してくるのである。しかしそれよりはむしろ黒人自身を大量に生産し白人の手に売りとばしたらどうか、という結論になるのである。そして彼等はそのように実行し、それで儲けた金で Issetibbeha は外国に出かけ、パリで彼の父 Doom を New Orleans で文明の裏側へ開眼させたフランス人 Chevalier Soeur Blonde de Vitry を訪ね、もう老人になっている彼は、悲劇的な顔をし、Issetibbeha

から借金し、その礼としてある会社に紹介され、一年間を過ごし、「金塗りのベッドと一対の枝付き飾り燭台と、赤い踵のついた上履一足」という全く愛玩の目的以外には何の役にもたたない代物をみやげに持帰るのである。Issetibbehaには奴隷を売った大金を白人の如く有利に使うべき方法を全然知らなかったのである。白人はインディアンを黒人の如く奴隷として使うことは出来なかったが、しかし決してそのレベルを彼等のところまで引上げることはせず、狡猾な手段で転落の道へ追いやったというべきであろう。

Issetibbehaの息子のMoketubbeは、Issetibbehaがパリから持帰った上履に3才になっても足を入れることが出来なかったし、16才になっても駄目だった。Issetibbehaは精神面でnormalな状態を失なっていたが、Moketubbeは精神面ばかりでなく肉体面までも不具になっていたといえる。そしてIssetibbehaは16才の息子が一生懸命その上履に足を入れようとしているのをみるのが人生の唯一の楽しみであるように思える。息子のしぐさを見ながら彼は言う。「どうやらわしも生きているのが好きらしいわい」("I too like being alive, it seems" [85])。彼には息子が愛玩動物なのである。彼の精神の衰弱は誠にあわれであると言うべきである。そしてこの首長を支える有能なBrain達もいない。これが文化を持たない民族の宿命というべきであろうか。

Issetibbehaが死ぬ5年前のMoketubbeは次のように描かれている。

> Moketubbe was twenty-five then, unmarried. Issetibbeha was not tall, but he was taller by six inches than his son and almost a hundred pounds lighter. Moketubbe was already diseased with flesh, with a pale, broad, inert face and dropsical hands and feet. [85]

Moketubbeが25才で結婚していないということは、インディアンの社会では、特に首長たるものとしては不自然である。作者が特にそのことに言及していることは、彼が肉体的にも精神的にも不具者であることを意味し、それにつづく記述にそれを裏付けるものが次々と列挙されているのをみてもうなずけるところである。上履のはけないMoketubbeをみ

て、Issetibbehaも我と我が身を反省する能力がよみがえる。しかし今更状況はどうにもならないところまで来ているのである。

Issetibbehaが死んでから首長の座についたMoketubbeは、10ガロンのウイスキー樽のそばで250ポンドもある風船そっくりの腹をかかえて椅子にすわり、足にはやっとあの赤い踵の上靴をはき、うしろから房飾りのついた大扇で若者に風を送らせている。そして、その表情は、深刻で(profound), 悲劇的で(tragic), 生気がなかった(inert)。そしてその姿は、その日も朝から何の変化もなかった。「彼は偶像のように、フロックコートにズボン、胸をはだけ、軽い緋色の踵のついた靴をはいたマレーの神のように見えた」 (He looked like an effigy, like a Malay god in frock coat, drawers, naked chest, the trivial scarlet-heeled shoes.[89])のである。

以上でインディアンの堕落の有様を三代の首長を追いながらみてきたわけであるが、この作品のテーマはそれだけではない。Issetibbehaの死と共に、このインディアンの種族に習慣として伝わっている「殉死」の問題がある。首長が死んだ場合その側仕えの者は、主人に仕えていた馬や犬と共に葬られるというならわしで、日本にもかつて存在していた習慣に似ている。しかしこの作品で問題となるのは、その側仕えの者が同じインディアンではなく、黒人奴隷の一人であるということである。これはインディアンが先に論じてきた首長の側ばかりでなく、当然のことながら一般のインディアンにもその無気力と末世症状が進んでいることを示しているといえよう。彼等インディアンには進んで首長のために身を投げ出す者はいない。奴隷と引換えに、彼等は働く意欲を失うと同時に、すべての美徳ともいうべきものを腐らせてしまったのである。その点をあるインディアンの老人は次の如く嘆く。その中には白人に対する絶望的な恨みの言葉がのべられている。

> "This world is going to the dogs," he said. "It is being ruined by white men. We got along fine fore years and years, before the white men foisted their Negroes upon us. In the old days the old men sat in the shade. and ate stewed deer's flesh and corn and smoked

tabacco and talked of honor and grave affairs, now what do we do? [87]

若い者が元気よく働き、狩に精を出し、時には身を賭して戦いにおもむき、老人が彼等に勇気と名誉と助言を与えて見守っていたよき時代が、この老人の脳裏をかすめるのである。なる程殉死という問題は一言では片付けられない代物である。ドイツに留学し、西洋の合理主義を身につけてそれを基盤にいくつかの作品を書いた森鷗外が乃木将軍の殉死によって日本の伝統的精神に目を向けたことはよく知られているが、乃木の殉死の是非は兎も角、あのような事件が起こる明治の日本の社会には、民族として発展するエネルギーがあったことは事実である。そして、それとは又逆の意味でこの作品の中で逃亡を企てた黒人奴隷にもある種のエネルギーが存在したとみることは出来ないであろうか。一方は殉死をえらび、一方は殉死を逃がれようとしているけれども、共にそれが自分の意志である点が共通しているからである。

二人のインディアンが、殉死からのがれるために、それが不可能と知りつつも一日たりとも生命の終焉を伸ばすべく逃亡する黒人奴隷を追って黒人の居住区にやってくる場面がある。彼等がそこにやってきた目的を知っている黒人達の眼の色や、その独特の強烈な臭い、そして彼等があたかも蛸のように体を寄せ合い、或は又、巨大な木の根っこのようにたくましく、無気味に、おしだまっている描写は、彼等が奴隷の身分とはいえ、黙々とある巨大な運命に挑戦しているかにみえる。

Faulknerが黒人を描く時、そこには大なり小なり彼等の抵抗の姿が、深く内に秘められた抵抗の姿がある。汗を流す黒人達の生命力は、彼等黒人の労働の上にあぐらをかく白人達を次第に圧倒するのである。そしてそれはやがて今日我々のみるアメリカにおける黒人の力の増大をみることになるであろう。その点をこの逃亡奴隷に焦点をあてて考えてみよう。

この殉死を強いられる黒人奴隷は、沼地に6日間潜んでいるのだが、その間に毒蛇に自らの腕を咬みつくにまかせているのである。インディ

アン達にはこのような行動にでる気力さえ残っているとは考えられない。この黒人はそのすぐあと、「それも自分が死にたくないからだ」("It's that I do not wish to die," [99])と一見矛盾する言葉を吐くが、それも死を目前にした黒人の最大限の抵抗というべきであろう。Faulknerは、この黒人を捕えにきたインディアンの一人と、この逃亡奴隷が、丸木橋の上で向かい合った時の状況を次のように描いている。

> In the middle of the afternoon he came face to face with an Indian. They were both on a footlog across a slough--- the Negro gaunt, lean, hard, tireless and desperate; the Indian thick, soft-looking, the apparent enbodiment of the ultimate and the supreme reluctance and inertia. The Indian made no move, no sound; he stood on the log and watched the Negro plunge into the slough and swim ashore and crash away into the undergrowth. [98]

「やつれて、やせて、屈強で、疲れを知らぬ、絶望的なニグロ」という表現は、Faulknerのいわゆるambivalentなものの典型であろう。しかし、黒人の状況をこれ程的確にあらわしているものはない。'gaunt,' 'lean,' 'desperate,'は、その黒人の、ひいては黒人全体の現在の姿であるが、同時に'hard,' 'tireless,'も同じく黒人の姿をあらわしている。そして後者は又、未来へ向かう黒人の姿であるといえよう。

これに対して「ふとって、体にしまりがなく、どうみても終局的、最大の不承不承と惰性のインディアン」という表現には、ambivalenceはみられない。Ambivalenceのないものには生命がなく、したがって未来がないということをFaulknerは暗示しているのだろうか。

黒人奴隷はいよいよ逮捕されようとする直前、丸木の上にすわって歌をうたう。そのあとで彼は自分の国の言葉で何かを唱えていたが、「彼の顔は昇る太陽に向けられていた」(his face lifted to the rising sun [102])のである。それはあたかも黒人の未来を象徴するかのようである。

Faulknerは、滅びゆくインディアンに哀切のまなこを向けると共に、その滅亡を速めた白人を批判し、黒人に対してはその抑圧された運命に深く同情を寄せると共に、彼等の未来には何か昇る太陽にも比されるべ

きものが感じられることを我々に訴え、且つ語りかけているように思われる。

(2)

"Wash" は1934年に Harper's Magazine に発表された短篇で、Faulkner の最大の問題作 *Absalom! Absalom!* (1936) の一部に織り込まれることになるのだが、この短篇ではいわゆる「南部の呪い」の重圧は *Absalom! Absalom!* 程強くはないとしても、Poor White の Wash Jones の悲劇はそれだけ印象的に読者に迫り、南部と、更にひろく人間一般の状況に鋭い刃を突きつける真迫性をもっている。

物語は、まだようやく17才の Wash の孫娘 Milly が生んだばかりの赤ん坊と共に寝ている藁ぶとんのベッドを Sutpen が手に乗馬鞭をもち、両脚を大きくふんばって見下している場面で始まる。この Sutpen が如何に威圧的で横柄な姿で現われているかで、我々は彼の人柄や、彼のつくり出す事件や、彼をとりまく世界を予見し得るけれども、更に Milly の生んだ子供が、60才を過ぎたこの老人の子供であり、そして自分の子供を生んだ Milly に投げかける最初の言葉が、次の引用文に見られる如きものである時、今まで神格化までしていた Sutpen に大鎌を振りかざさざるを得なかった Wash の必然性を我々は極めて自然に受けいれることが出来よう。

> "Well, Milly," Sutpen said, "Too bad you're not a mare. Then I could give you a decent stall in the stable." [144] [3)]

Sutpen は如何に孫程年のちがう Milly に対してとはいえ、自分の子供を生んだ彼女を、そして何よりも先ず人間である彼女を、雌馬以下にみなしている身の毛もよだつ言葉を、何のためらいもなく吐くのである。それに対して精一杯の抵抗を示すが如く、不機嫌な (sullen), 底意の知れ

---

3) *The Portable Faulkner,* edited by Malcom Cowley, p.144. 以下引用文の文尾の数字は上掲書同巻の頁数をあらわす。

ない (inscrutable) 顔をして彼を見つめているMillyなどまるで眼中になきが如く、そばにうずくまっている黒人女にその朝生まれた子馬の話をするのである。Millyの生んだ赤ん坊が女であることを知らされると、「ふーん」("Hah") と答えただけで直ちに話題を子馬の方へと戻すのである。やがてSutpenはMillyと赤ん坊のいる小屋の壊れかかった戸口を出てくるのだが、その時、彼にどういう運命が待っていたか彼には全く予知出来なかった。

WashはSutpenが所有していた大農場の河岸の沼地にSutpenが独身時代に魚釣り小屋として建て、今では荒れ果てて、作者の描写によれば「年老いた野獣か病んだけものが瀕死の状態で水を飲もうとして、物すごい恰好で這いつくばっているようにみえる」

(looked like an aged or sick wild beast crawled terrifically there to drink in the act of dying [145])

丸木小屋に住んでいたのだが、18才から50才までの男で南北戦争に出かけなかった数少ない白人の一人だった。そのことに関して彼は尋ねられもしないのに、「おらあ、大佐の屋敷と黒ん坊の面倒をみてるだ」(I'm looking after the Kernel's place and niggers [145]) というのだったが、みんなはそれが嘘であることを見抜いていた。我々が貧乏白人の問題を考える時、このWashのように、白人でありながら彼等の社会的状況が自ら南軍に加わること、即ち義侠心と名誉心を失うまでに至らしめている事実に注目しなければならない。それ故にこそ尚更彼がSutpen大佐によせる偶像崇拝化は大きいものであったと考えられる。Washの嘘は実際にはそういう自己暗示にかかっていたという面もあったに違いない。しかしSutpen家の黒人達はそんなことを聞いたら吹き出してしまったであろう。というのはWashの小屋とSutpenの屋敷をむすぶ小路などでWashと黒人達との間で次のようなやり取りがあったからである。

"Why ain't you at de war, white man?"

Pausing, he would look about the rug of black faces and white eyes and teeth behind which derision lurked. "Because I got a

daughter and family to keep," he said.
"Git out of my road, niggers."
"Niggers?" they repeated, "niggers?" laughing now. "Who him, calling us niggers?"
"Yes," he said. "I ain't got no niggers to look after my folks if I was gone." [145–146]

ここには互いに相手より社会的に有利に立とうとし、社会の最底辺に自分が属していないことを血みどろに主張し合う貧乏白人と黒人の二つの階層がある。Sutpenのレベルまではとても昇れるなどとは考えてはいないが、最下層にだけはいたくないという心理、いわゆる優越感、何かに対して自分が優越感を持つことによって生きる人間の心理、それが実に見事にえがかれている。それは更にMrs. Sutpenが北部連盟軍の通過と共に、黒人ばかりでなく、殆どすべての者がいなくなったため、Washのところへ使いをやって裏庭の山葡萄を取って来させた時の黒人女の烈しい態度にもはっきりあらわれている。彼女は台所の踏み段のところで振り向いてWashに言うのであった。「そこでとどまってくだせえ、白人さん。そこから動かねえで止まってくだせえ。大佐がおいでになったあいだ、あんたは一度だってこの段を踏み越えたことはねえ人だで。いまだってそんなことは出来ねえはずだぜ」

("Stop right dar, white man. Stop right whar you is You ain't never crossed dese steps whilst Cunnel here; and you ain't ghy' do hit now." [146])

しかしWashは黒人にそんな態度をとられた時など、Sutpenが立派な容姿の種馬に乗って農場を馳けめぐる姿を思い起こし、自分も白人の一人であるという意識が湧きあがり、「聖書の教えるところによると、畜生として、また白人のあらゆる者の奴隷として神が創り、かつ呪ったはずの黒人が、彼や彼の身内のものより金廻りがよく、住居も上等で、着るものまでが立派であるといったこの世の中など——彼がいつも自分のまわりに黒い笑いの嘲けるようなこだまを感じとっているこの世の中は、実は夢まぼろしにすぎない」

(. . . . Negroes, whom the Bible told him had been created and cursed by God to be brute and vassal to all men of white skin, were better found and housed and even clothed than he and his; that world in which he sensed always about him mocking echoes of black laughter was but a dream and illusion [147])

と思うのであった。Washはこのようにして自分を南部の英雄と彼には思えたSutpenと同一化しようと必死につとめているのであった。

Millyが15才になった頃、彼女の腰にリボンがついているのをWashは認めた。それはSutpenからのものだったが、Washの脳裏に一抹の不安はよぎったものの、ただMillyに、大佐にお礼を言うのを忘れないように、というのだった。しかしMillyがドレスを贈られた時は、まだあれは15にすぎないから、と一言Sutpenに針をさしたものの、「おらあ、だんなが外の人ならおらと同じだけ年をとっていると言うだよ。そして年寄りであろうとなかろうと、その人の手から渡るものは、着物にしろ何にしろあの娘に持たしゃしねえ。だがあんただけは違うんだ。……あんたのすることに間違いはねえってこたあ、わかっているだよ」

(And I know that whatever you handle or tech, whether hit's a regiment of men or a ignorant gal or just a hound dog, *that you will make hit right.* [150]) （イタリックス筆者）と。

Washは自分の疑念を払いのけるように、或はそれが単なる危惧にすぎないことを祈るかのようにそう言いながら切実なまなざしをSutpenに向けるのであった。しかし、その時Sutpenが突然身を翻えして視線をそらせたことは、そしてその場面を転換させるべく、Washに酒を持ってくるように命じたことは、彼の心の蔭りをはっきりと物語っている。

そしていよいよ場面はこの物語の最初の部分に結びつくのである。Washは黒人の産婆から、Millyの生んだ子が女だと知らされた時、「女の子か」と二度くりかえし、更にもう一度「女なんか生みやがって」とくやしがるのだが、やがて気を取りなおし、「どうです旦那、おらも長生きしてとうとうひい祖父さんになったでねえか」("Yes, sir. Be dawg if

I ain't lived to be a great-grandpaw after all." [152])と Sutpen に報告に出かけようとしたのである。

しかしその必要はなかった。3ケ月前さっき彼がその中を歩いてきたその雑草を刈り取るために借りた大鎌の立てかけてあるポーチの角をまがり切らないうちにSutpen自身が老いた種馬にまたがって乗りつけてきたからである。Washは Sutpenが Millyの生んだ子供のために朝早くやってきたものだと思い込んだ。Washは Sutpenに話しかけた。「大佐、女の子ですよ。いやはやあんたもおらと同じ位年とったじゃねえか—」("Hit's a gal, kernel. I be dawg if you ain't as old as I am . . . . " [152])。しかし Sutpenは何もいわず小屋に入ったのだが、彼が乗ってきた種馬の手綱をもっているWashの耳に聞えてきたのはあの冒頭のSutpenと黒人女との会話であったのである。

Wash は目の前が一瞬にして暗闇と化すのを感じ、今まで南部の英雄として彼の偶像であったSutpenが、自分や自分の孫娘に対して、全く人間に対する感情を微塵も持っていなかったこと、彼にとってはMillyの生んだ彼自身の子供でさえ子馬以下の取扱いしかしない人間であることを、今、厳然と知らされたのである。

今まで一度たりとも彼に逆ったことのないWashが大鎌を握ってSutpenにとびかかっていくのに何の猶予もなかった。彼にとっては、SutpenのMillyに対する仕打ちに、自分と自分達貧乏白人に注がれていたSutpenの目が如何なるものであったかを知り、彼も一人の人間としてその恥辱に耐ええなかったからである。

Wash が孫娘と生まれたばかりの赤ん坊の傍に近寄り、「何かほしいものはないか」("Do you want ara thing?" [154]) と尋ねる姿程哀れで痛ましいものはないであろう。彼等一家の最後はもう目の前にきており、しかもそれを知らずに産褥のやつれた顔を時折赤ん坊に向けている幼ない母親をWashは見るに耐えなかったとしても誰が異議を唱えるものがあろうか。

Wash を逮捕にやってくる連中の馬のひづめの足音がだんだん近づい

てきた。その連中はSutpenと同類の人間であり、Washが葡萄棚までしか近寄れなかった時にSutpenのテーブルのまわりに寄集っていた連中であった。「若い者達に戦場での戦い方を教え、あるいは又将軍達の手から彼等こそ勇敢なものの一人であると署名入りの書きつけをもらったかも知れない人達、又その昔美しい農場の中を美しい馬に跨がって傲然と、誇らしげに馬を走らせた人達」

(men who had also shown the lesser ones how to fight in battle, who maybe also had signed papers from the generals saying that they were among the first of the brave; who had also galloped in the old days arrogant and proud on the fine heroes across the fine plantations [155])

であった。彼がその勇敢さと、誇りと、名誉のためにいつもあこがれと尊敬を与えていた人達であった。その連中が、今自分をめがけて彼にとっては絶望と悲哀の突進をしてくるのであった。Washは南軍を打ち敗った北軍を、Sutpen農場を、そして南部と南部人を打ち負かした北の輩を憎み続けてきたのであったが、今や思いもかけず、その南部の勇士達を敵とすることになったのである。彼は南軍のかっての勇士達が一人も戦場から帰って来なければよかった、とつぶやきながら、次のように考えるのであった。

Better if his kind and mine too had never drawn the breath of life on this earth. Better that all who remain of us be blasted from the face of earth than that another Wash Jones should see his whole life shredded from him and shrival away like a dried shuck thrown onto the fine. [157]

Washの心境からすればこの地球が爆発してすべてが吹っとんでしまうことが最大の望みであったであろう。しかし、それも不可能な今、彼に残されたただ一つの方法は死物狂いの抵抗を、かつては尊敬し、偶像化し、そして今ではSutpen同様絶望した南部の勇士共の真只中に試みることしかなかった。Washは、小屋にあった油に火をつけると、そのめらめらと燃えあがる真赤な焔を背にして、Sutpenに使ったと同じ大鎌を振

りあげて彼等に襲いかかっていくのであった。それが貧乏白人Washの運命であったのである。

ここで我々は少しSutpenについて考えてみる必要がある。Sutpenの一生については先にのべた*Absalom! Absalom!*の中に詳しく語られているが、"Wash"の中だけにみるSutpen像だけではややその一面のみを見る嫌いがないではない。それには"Wash"にみられるSutpenなる人物が形成されるにいたった過程と、その形成を育てた土壌とを少し考えてみなければならない。

Sutpenは、1804年、Virginiaの山中でスコットランド系とイングランド系の血をうけた貧乏白人の大家族の一子として生まれ、そこはまだ、いわば原始共産社会のようなところで、黒人奴隷制度や、社会階級の上下の存在など、風のたよりに聞くことはあっても、幼い時の彼には理解出来ないことだった。

ところが、10才の時母に死別し、一家は海岸地方に移り住み、そこで彼は次第に「文明」にまつわる社会に開眼していったのである。そしてやがて自分も奴隷を所有する富裕な地主階級の一員に立身しようと夢想するようになる。こんな時彼は西インド諸島での荒かせぎの噂を聞き、そこに赴き、そこでフランス系の砂糖栽培業者の信を得て、彼の一人娘Eulaliaと結婚する。彼の計画は着々と実現しつつあったが、そのうち彼女に黒人の血があることを知り、これでは自分のめざす南部貴族にはなれないと思い、彼女と離婚する。

やがて彼はいよいよMississippi州Jeffersonに登場する。ここで彼はIndianの酋長から、殆ど奪うようにして、川辺の広大な土地を手に入れ、そこにSutpen Hundred（サトペン荘園）を築いていくのである。しかし彼の家族はまさに呪われたように次々とこの世を去り、その荘園の後継者としてSutpenはMillyに男の子を生ませようとしたのである。「女の子か」とSutpenもWashも嘆息まじりにつぶやいたのはそのためであった。

ここで考えさせられるのはこの南部の社会構造の問題である。大土地所有が許され、奴隷使用が可能である社会にあっては、誰しも Sutpen 同様の夢を描くであろう。そしてそれに一歩一歩近づいていく過程の中で、彼等は残酷さと非情さを身につけていくであろう。そしてその残酷と非情は、彼等の性格となって固定してしまうであろう。SutpenもWashを逮捕に来た者の幾人かもそうであった。そういう社会の中では、土地を所有しない者、社会の底辺にある者達は、ただ牛馬の如く働かされるか、自ら働く意欲を喪失し、Washのように白人でありながら、南北戦争に出かける意志さえも持てない人間になる可能性も存在してくるのである。作者はWashの押しつめられた人間としての最後の反抗を巧みに描く中にも、このような名誉を喪失せざるをえなかった面をも忘れずに描いている。つまりこれによって、広大な土地所有という社会制度のもたらす人間性の歪みに対する鋭い洞察をおこない、そういう社会構造の前近代性が、南北戦争にも敗れる原因であったということをWashと共に語りかけているようでもある。

(3)

"Pantaloon in Black" は *Go Down, Moses* (1942) に収録された、通称 Rider なる黒人の、一人の人間としての尊厳と、その確立に敗れ、リンチによって殺される悲劇を取扱った短篇である。

物語は例のフラッシュ・バックの手法によってRiderの妻Mannieの埋葬の場面から始まる。Riderとは反対に細身の弱々しかったMannieの亡骸に、土を軽々と、しかも黙々とかけている Rider の姿は、悲しみを押し殺した、黒人独特のものというべきであろう。彼の叔母の「食べなきゃなんねえよ。おらのうちへきて食べるがええだ」("You needs to eat. You come on home and eat" [99][4])という言葉も振り切って今は待

4) William Faulkner, *Go Down, Moses* (Chatto & Windus, 1974), p.99.
以下引用文の末尾の数字は上掲書同巻の頁をあらわす。

つ者とていない我が家——それも借家ではあるが——へ急ぐRiderを迎えたものは、他人の住居の如くみえる、自分がそこにいるのさえ不思議に思える我が家だったのである。

今ここでRiderがMannieと「火と暖炉」の生活——これはRiderの家主の一番古い借家人であるLucas Beauchampじいさんが、44年間も暖炉に火を燃しつづけているという噂にならって、二人が結婚した夜に火を燃し始めたことからそのように表現出来ると思うが——を物語る一節を引用してみる。そこには二人のささやかながら、愛と、いたわりと、信頼の生活が心暖まる如く描かれているからである。これはこの物語に登場する白人達にとっては、一笑にふす性質のものであったかも知れないが、作者Faulknerにとっては真実を失い始めているかにみえる白人に突きつけられるべきである一つの姿であったといえよう。

> Then the first hour would not have passed noon when he would mount the steps and knock, not on post or door-frame but on the underside of the gallery roof itself, and enter and ring the bright cascade of silver dollers onto the scrubbed table in the kitchen where his dinner simmered on the stove and the galvanised tub of hot water and the baking powder can of soft soap and the towel made of scalded flour sacks sewn together and his clean overalls and shirt waited, and Mannie would gather up the money and walk the half-mile to the commissary and buy their next week's supplies and bank the rest of the money in Edmonds's safe and return and they would eat once again without haste or hurry after five days ---- the sidemeat, the greens, the cornbread, the buttermilk from the well-house, the cake which she baked every Saturday now that she had a stove to bake in. [101]

虐げられた今までの黒人としての精神的にも肉体的にも惨めな生活の中で、ただ家庭の中におけるのみの楽しい幸福を奪われたRiderが、この空虚で、索漠とした部屋の中にみたものはMannieの亡霊であった。彼女が彼の前から消えようとすると、「おらも一緒に連れていってくれろ」("Den lemme go wid you, honey" [103])と呼びかけるのである。し

かしそれが不可能と知ると、冷えた、膠のような豆を口の中に抛り込むと、二人で飼っていた犬と一緒に夜の山野に飛び出していくのであった。そして彼は月が昇っていく間、そしてそれが頭上に達し、やがて沈んでいく間も、人家を避けるようにして走り続け、その行為によってあたかもMannieの面影を彼の頭から消さんとするかの如くであった。そして彼のその仕草は、彼が働いている製材所においても続くのである。一晩中走り続けたにも拘らず、次の日には、黒い肌に流れる汗を滴らせて丸太を処理するのであった。その姿は、

> ---- himself man-height again above the heads which carefully refrained from looking at him, stripped to the waist now, the shirt removed and the overalls knotted about his hips by the suspender straps, his upper body bare except for the handkercgief about his neck and the cap clapped and clinging somehow over his right ear, the mounting colored bunch and slip of muscles ---- [105]

の描写の中に鮮やかである。

しかし、このように自分の体を酷使することによってMannieと、奪い去られた彼女との唯一のしあわせを忘れようと努めたRiderではあったが、それも結局は徒労でしかなかった。彼は仕事の途中で製材所を抜け出すと、4マイル離れた川のそばの森の中の白人の密造酒小屋に現われたのであった。

我々はともすると、仕事に没入することによって癒すことの出来なかった悲しみと苦しみを酒に求めることの中に意志の弱さのようなものを感じ勝ちである。しかし既に述べたように、「火と暖炉」の外はすべて闇である黒人の置かれている状況を考えてみなければならない。

Riderのおじとおばは、Riderの心中を察していろいろと気を配り、食事などを届けている。そしてその時彼等の口から洩れる言葉はいつも、「神を信じ、信頼するんだ」であった。しかし、その叔父達の時代なら兎も角、Riderの時代と、彼自身の持つ一人の人間としての自覚は、Mannieを失った今は尚更のこと、神を信じることを出来なくさせていたのである。

Riderは叔父の言葉に対して一言、堰を切った水の如く、「一体Mannie

が神様に何をしたというのかね。何だって神様は俺にお節介しにこようなどと——」("Whut Mannie ever done ter Him? Whut He wanter come messin wid me and ----" [106]) と不信をぶちまけている。それは明らかに黒人の人権の自覚の一歩前進を示すものである。

遂に酒に手をつけてしまった Rider は悲劇に向かって突走ることになる。彼は道具部屋の中で博打が行なわれていることを知ると、何か心に期するかの如くその中に入っていく。彼は白人の夜警が若い黒人共を相手にイカサマ賭博をやっているのを知っていたのである。Rider の白人に対する長年の恨みは爆発した。白人がイカサマで金をせしめているのを見破った彼は白人の手がサイコロに届く前にその腕首をつかみ、「おらあ、どんなイカサマサイコロだって勝てますだがね。だけんどここにいる若え者達は——」("Ah kin pass even wid miss-outs. But dese hyar yuther boys ----" [112]) と黒人の哀れさを見兼ね、黒人の先頭に立って白人に挑戦したのである。その白人が尻のポケットにあるピストルを取り出すよりも早く、彼の剃刀が白人の喉に向かっていた。

Rider は法と裁判による正当な方法ではなく、犯人不明のリンチによって殺され、近親者の手に引き渡されたのであった。それは保安官や検死官の黒人に対する根本的な見方に起因することは明らかである。この事件を担当した保安官補は、妻に対してこの事件を語る言葉の中で、「だって奴等は人間じゃないからさ。そりゃあ人間みたいな顔はしているし、人間みたいにちゃんと二本の足で歩きやがるし、しゃべることもできりゃ、奴等の言うことをこっちが理解することも出来る。いや少くともときにゃこっちの言うことを奴等が理解しているような気がすることもあるがね。しかしいったん正常な人間感情とか、人間の情などということになると、やつらは全くろくでもない野牛の群と同然なんだ」

("Because they ain't human, They look like a man and they walk on their hind legs like a man, and they can talk and you can understand them and you think they are understanding you, at least now and then. But when it comes to the normal human feelings and sentiments of human beings, they might just as well be a damn herd

of wild buffaloes" [113])

といって、Rider が Mannie の埋葬の翌日すぐに仕事に戻ったことの例をあげている。これが人間感情を持たないというわけである。しかし彼には Rider が既に述べた如く、家に居るのが耐えられなかった気持ちが理解出来ないのである。そして彼等検察側には、Riderのおばが、「あの子はおらがちゃんと育てようとつとめてきましただ。とってもええ子だった。今まで悶着を起したことなんど一度もねえだで。自分のしたことできっと苦しむに違いねえですだ。だけんど白人がたにあの子をつかめえさせねえようにしておくんなせえ」 ("Ah tried to raise him right. He was a good boy. He ain't never been in trouble till now. He will suffer for what be done. But dont let the white folks get him. [115]) といって、彼と一緒に自ら独房に入っていったこの老婆の、白人達よりも遥かに人間的な感情などわかる筈はないのである。

もう一人の保安官補Ketchamは、次の保安官に立候補するかもしれないという思惑から、Rider に殺られた Birdsong の子分や、身内の連中からの票と、一般白人への阿らいから、Riderのリンチによる殺人を計画し、同じく種々の理由でその獄舎に鎖がれている黒人を、蹴っとばし、ピストルの横面でひっぱたいて Rider へのリンチを強制したのである。その時 Rider の笑いながら、「おらあ考えることが止められねえみてえだ。どうしても止めることが出来ねえみてえだ」 ("Hit look lack Ah just can't quit thinking. Look lack Ah just can't quit" [116]) という言葉の中には、白人と黒人とのあまりにも不合理な社会の仕組みが、死の間際にいよいよ強く彼を占領していたというべきであろう。

最後に注目すべきはこの保安官補の妻のこの事件に対する態度である。保安官補は夕食前に事件のことを妻に当然ながらあまり熱を入れる風でもなく話しているのだが、彼女はそれに大した関心を示さないばかりか、自分がその夜映画に行くために彼に５分間で食事をしてくれと言うのである。彼女は１日中郡役所のあたりに坐っておしゃべりばかりしている夫を含めて保安官達を軽蔑している風なのだが、彼女とて黒人の命がど

うなろうと問題ではないのである。彼等は二人共同じ穴のむじなであり、「人間感情を持たない」のは、むしろ彼等白人達である。Faulkner は *Absalom! Absalom!* で、最後に生残るのは黒人の Jim Bond であるとしている如く、この作品でも白人の堕落を鋭く指摘すると共に、南部を告発し、その将来に深く想いを馳せているのを読みとることが出来る。そしてそのような作者の気持ちは、次の *Absalom! Absalom!* 中の Quentin の言葉に代表されるといってよかろう。その ambivalence は、文中の「南部」を「人間」と置きかえることをも可能にするのではなかろうか。

I don't. I dont! I don't hate it (= the South)! I dont hate it! [5]

5) William Faulkner: *Absalom! Absalom!* (Chatto & Windus) p.378.